カトリック仙台教区報

2012年1月1日　No.203
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

仙台教区「新しい創造」　2012年

＝司教年頭書簡＝
人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい（マタイ7・12）
司教　マルチノ平賀 徹夫

仙台教区の皆さま、東日本大震災という未曾有の大艱難に襲われた2011年から、年は2012年へと改まりました。しかし新しい年になったからといって大震災でもたらされた苦しみが去ったわけではありません。2万人にも及ぶ亡くなられた方々・行方不明の方々を悼む悲しみは癒えていません。また、あの大地震・大津波によって家や仕事など生活の基盤を失うという大変な被害を受けたたくさんの方々とご家族、福島第一原発の爆発事故によりよその土地への避難を余儀なくされたたくさんのご家族の、苦悩や不安が薄れることなく今なお続いているという現実には、だれもが心を痛めずにはいられないでしょう。その方々はわたしたちの兄弟姉妹なのだと主イエスはわたしたちに教えられました。

大震災から学んだこと

昨年3月11日の大震災発生から5日目、カリタスジャパンの全面的な支援を得て「仙台教区サポートセンター（SDSC）」を立ち上げました。その仕事の大きな部分は、日本全国から被災地・被災者を助けたいと志願してくるボランティアへの対応です。そのために3月17日付けで、救援活動のベースとして教会関係の建物を提供してくれるようにと教区内の教会に書簡を送ったところ、ありがたいことに、不便を覚悟で、提供してよい旨の応答が4教会（塩釜、石巻、釜石、米川）からあり、続々と志願してくるボランティアの人たちを受け入れ、派遣することができました。SDSCと直接つながらなくとも、福島県・いわき地区はさいたま教区、岩手県・宮古教会は札幌教区からのボランティア支援活動を受け入れてくれましたし、被災地にある他の教会でも、直接支援に現れる方たちと共に被災された方々への援助にあたってくれたところもあります。仙台教区の信者の皆さんの中にもボランティア活動に参加された方も数多くおいでしょう。苦しんでいる方々（兄弟たち）のために手を差し伸べることは神の子らの業です。そしてありがたいことです。ところで、SDSCに登録・派遣されたボランティアの数は3，300人を超えましたが、その6割以上はカトリックでない方たちだったということです。人は、カトリックであろうがなかろうが、まさに善きサマリア人のように、苦しんでいる人を助ける神の子らの業を行うために走り寄るのです。多くのボランティアさんから、ほんの些細なことでもとても喜んでもらえてうれしかった、という体験が語られていました。マザーテレサの言葉にもありましたが、どれだけ大きなことをするかではなく、どんなに愛を込めて行うかが大切なのだということを体験した貴重な言葉でしょう。

日本の全教会と全世界からの支援

大震災後すぐ、日本のカトリック司教団も仙台教区の支援のために動いてくださいました。担当司教に新潟教区の菊地功司教様を決定し、そして菊地司教様は補佐として大阪教区事務局長の神田裕神父様、事務局に大阪教区職員の濱口一則師を選任しました。お三方はSDSCとも連携しながら、教区の復興活動に重要な役割を担い続けてくださっています。また、仙台以外の日本の15教区も、司祭や修道者の派遣、被災地復興のプ〈

生命の泉

▼大震災の年が明けてこの1年が始まるにあたって思い浮かぶのは「その日、その時は、誰も知らない。…気を付けて、目を覚ましていなさい」（マタイ11・15）とのイエス様の警告のみ言葉だ▼ある人は小さな余震でも揺れる予兆が聞こえるといいますし、また世界規模で拡大する人為的な不安が心を騒がしています。誰が儲けているのかほんの一部の人に富が集中していく現状の中で経済格差反対にデモが起こり人々の共感を呼び、「アラブの春」と総称される中東各国の独裁者打倒で流血が起きる。またアメリカの民間会社による各国の財政状態がランク付けされる▼大学も格付けされる。国内高校も大学合格者数を競い、どこもかしこも騒然としている▼戦争がなく経済活動が活発であれば平和だといえる時代は終わった。どこかの豊かさは、どこかにしわ寄せされていることを知らされる無関心ではいられなくなった時代です▼「人がひとりでいるのは良くない」（創世記2・18）を被災教区として実感した。一番になることよりみんなが生きられるように願う成熟した信仰の年にしなければならない。（守）

ロジェクトを立ち上げるなど精力的に支援してくださいます。男女の修道会・宣教会の組織からも人材を送るなど、日本の教会が一つになり、いわばオールジャパンで仙台教区のために大きな犠牲を払ってくださっています。

仙台教区に寄せられる連帯・お見舞い・励ましの祈りやメッセージと救援金も驚くほどの数、額にのぼりました。いろいろな国の司教協議会や教区から、国内外の小教区教会、学校、会社や団体、個人など、文字通り全世界各地から寄せられました。国内・海外あわせた義援金の総額は、6億5千万円を超えました。これは被災して壊れた教会、修道院、学校、幼稚園や施設・事業所の修繕費用に、また、被災された信徒個人への見舞金、生活支援金などに使われます。心のこもったこれらの支援は本当にありがたく、「世界は一つ」を実感させられます。

「新しい創造」基本計画と第2期に向けて

大震災からの復旧・復興に向けて、昨年4月18日に「仙台教区『新しい創造』基本計画」を、そして震災から半年後の9月11日付けで、「『新しい創造』基本計画、第2期に向けて」を発表しました。

「洗礼によりキリストと結ばれることによって新しく創造されたものである私たち教会は、キリストが抱いたと同じ思いを抱きながら、一日一日、一層の『新しい創造』へと力強く歩みたい」というのが基本方針で、それは変わりません。わたしたちはますます強く、固く、キリストに結ばれたものとなり、キリストの心を心として、被災し苦しんでいる方々と共に歩んで行きたい、ということです。具体的には次の3点が挙げられます。①広く被災地と被災した人々を視野に置き、その中でも特に、支援の手が届きにくい「谷間」におかれた地域や人々に寄り添い支えることを目指す。②その活動に多くの小教区が協力してあたることを通して「我々は主において一つ」を確認したい。③その実施には痛みが伴うことを厭わない。

ベネディクト16世教皇は回勅『希望による救い』(28)で次のように教えています。「わたしたちの神との関係は、イエスとの交わりを通して築かれます。わたしたちは神との関係を、独りで、あるいは自分の力だけでもつのではありません。ところで、イエスとの関係とは、すべての人のあがないとしてご自身をささげたかたとの関係です。イエス・キリストとの交わりは、わたしたちを『すべての人のための存在』であるかたへと引き寄せます。そしてこれがわたしたちのあり方となります。イエス・キリストはわたしたちが他の人のために生きるよう命じます」。

結び

わたしたちはあの大震災で大変な苦しみを経験しました。しかし国内はじめ全世界からのありがたい善意の支援やボランティアの働きなどを通して、人間の良さに気づかされたこともたくさんあり、人間は神の似姿として創造されたということが真実であることを垣間見させてもらう気がしました。しかしあの苦しみの中にまだたくさんの方たちがいます。苦しみを経験した者は苦しみの中にある人々の思いに共感できるはずです。今度は私たちの番です。わたしたちには兄弟であるその方々のことを忘れず、父である神の慈しみと助けを願い求め続ける義務があります。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」との主キリストの言葉をいただいています。損だという気持ちが起こったり、痛みが伴ったりするかもしれませんが、人任せではなく、一人ひとり「わたしをお使いください」と祈りながら他の人にかかわっていく生き方に進みたいものです。

それでは年の初めにあたり、わたしたちが求めたり思ったりすることすべてをはるかに超えてかなえることのおできになる方、父である神からの祝福が皆様お一人お一人の上に豊かに注がれますようにお祈りいたします。

2012年1月1日

「今すぐ原発の廃止を」仙台で司教団メッセージ

日韓司教交流会で仙台に集まっていた日本司教団は、特別臨時司教総会を開き、「今すぐ原発の廃止を～福島原発事故という悲劇的な災害を前にして～」と題した声明を採択し、11月10日(月)元寺小路教会大聖堂で司教協議会会長の池長潤大司教(大阪教区)ら5人の司教が記者会見をして発表した。

メッセージは、「日本に住む全ての皆様へ」向けられたもので、「福島原発近隣の地域から10万人近くの住民が避難し、多くの人々が不安におびえた生活を余儀なくされている」現状を踏まえ、今回の事故を引き起こした要因には「科学技術を過信し、『人間の限界をわきまえる英知』を持たなかった」ことにあると指摘した。さらに、「私たち人間には神の被造物である全てのいのち、自然を守り、子孫により安全で安心できる環境をわたす責任がある」ことから「経済至上主義ではなく、尊いいのち、美しい自然を守るために原発廃止を今すぐ決断」すべきこと、「国策によって原発が推進されたことで、「自然エネルギーの開発、普及が遅れ」たことを踏まえ「自然エネルギーの開発と推進を最優先」すべきことを訴えた。さらに、「日本には自然と共生してきた文化と知恵と伝統があり、神道や仏教などの諸宗教にもその精神」があり、「キリスト教にも清貧という精神」がある。「キリスト者は『単純質素な生活、祈りの精神、全ての人々に対する愛、とくに小さく貧しい人々への愛、従順、謙遜、離脱、自己犠牲』などによって、福音の精神に基づく単純質素な生活様式を選び直すべき」と訴えている。

発表にあたっては、このメッセージは、全司教の合意のもとに作成されたことが強調された。また、同席した岡田武夫大司教(東京教区)は、今回の事故をバベルの塔になぞらえ、神を恐れぬ人間の傲慢さ、飽くなき欲求がもたらしたものといえる。わたしたちは、心を改め謙虚で清貧な生活、自然と調和のとれた生活へと転換していく必要があると発言された。

司教日程　1月・2月

1・1(日) 元寺小路教会
10(火) 司祭評・役、教区司祭団・役
13(金) 社会司教委員会
15(日) 北仙台教会
16～17 男女修道会宣教会フォーラム
20(金) 部落差別人権委・事務局会議
21(土) 宣教司牧評 役員会
27(金) 仙台教区サポート会議
30(月) 教区司祭団月例会、移住者司牧会議
2・2(木) 学校法人理事会
7(火) 司祭評定例、司祭団役員会
12(日) カ障連研修会
13～17 臨時司教総会
18(土) 宣教司牧評 役員会
24(土) 仙台教区サポート会議
27(月) 県別司祭の集い

被災者に寄り添うために
仙台教区研修会「傾聴」

仙台教区宣教司牧協議会主催の２０１１年度「仙台教区研修会」は、「傾聴とは―被災者に寄り添うため、本来の教会の役割を見つめるため―」をテーマに、仙台教区サポートセンター傾聴チームの協力のもと、各県ごとに開催された。青森県は11月5日（土）本町教会で、宮城県は11月23日（水・勤労感謝の日）元寺小路教会で、岩手県は11月3日（木・文化の日）四ツ家教会で開催された。なお、福島県では来年2月11日、郡山教会で開催される予定。

～青森県～

仙台教区サポートセンターから3名の講師を迎え、11月5日（土）青森市の本町教会で開催され、65名が参加した。

最初に、震災当初からサポートセンターにかかわっていたチームリーダーの園部英俊さんから講師紹介とオリエンテーションがあり、講義に入った。

第1講話の講師は、仙台青葉学院短大講師の赤井聖子さん（東仙台教会）＝写真＝が『傾聴とは？傾聴の基本的な心構え、寄り添うことの意味』と題して、傾聴は人間関係を構築するうえで柱であり、相手の話に十分に耳を傾け、理解する必要があり、話の背後にある感情を受け止め、共感を示すこと、話す以外の行動にも注意を向け理解する。特に、聞き手は、表情、姿勢、態度など言葉以外のことにも留意すること、相手を尊敬し、感謝、ねぎらいの言葉をかけること、傾聴は1時間以内が適切な時間であると話された。

昼食・休憩をはさみ午後の第2講話は、釜石などでボランティア活動を続けているスピリチュアルケースワーカーの宇根節（うねたかし）さん（神戸中央教会）が『釜石ベースでの活動から』と題して、震災により釜石では10万人の人口が4万人に減少した。津波は2階まで来たところもあり、街中が瓦礫に埋め尽くされた状況を説明された。

現在被災者は、仮設住宅及びみなし仮設住宅に入居し、身のよりどころが安定して、自分の内面を語れるようになった人がいる反面、語れなくなった人もいて、今後、心のケアを提供することが必要であると話され、被災者の声をスクリーンに投影しながら、参加者に順次声を出して読んでもらい、参加者全員で共有した。

傾聴にあたっては、「指導」と「傾聴」の違いや、感情に入り込まないこと、ただ聞いて共感するだけでなく、その人の持っている力、生きる支えを受け止め、確認することの大切さ、いただいた出会いを大切にしたいものだと話された。

2人の講話の後、参加者を6グループに分け、グループワーク（ロールプレイ・模擬体験）が行われ、各グループが進行係、演技者（話し手と聴き手）、観察者の役割を決め、ロールプレイングを始めた。

取り上げた内容は、家庭内の嫁と姑との問題、母親を亡くした心情などの課題に取り組んだ。

演技終了後、観察者は演技者に対してコメントを発表し討議を行い、その結果を全体会で発表した。

講師（インストラクター）からのアドバイスとして、良い点、改善点、プレゼント（こうすれば良くなる）についての説明があった。

最後の質疑応答の中で、被災地のボランティアに従事した参加者から、仮設住宅を回り、いろいろ聞かされ「傾聴」の重要性を認識した、そして悲しい中でも教会ではミサがあり、ブラザーの皆さんとの分かち合いもあり、実りが自分の中に湧き出たことなどの事例発表があった。

まとめとして講師から、「傾聴」は秘密が守られている場所ですべきであり、守秘義務を伴う、ケアをしようとする人は、コミュニティの一員にさせていただく気持ちが大切であるとの助言があった。

この研修会を通して教区の「新しい創造」基本計画の第2期に向けての活動の一助になればと、参加者一同認識を新たにし閉会した。

（宣教司牧評　青森県代表　久世満正）

～宮城県～

11月23日（水）、元寺小路教会において午後1時から16時まで行われ、133名が参加した。半日のスケジュールということで、二人の講師のお話を聞いた後、ロールプレイは講師の方が演技＝写真＝、全員が観察者となり、その後、13チームに分かれて分かち合いを行った。

実際に傾聴する立場になった時、あのようにうまくできるか心配だ、何かアドバイスをしなければという気持ちを抑えることができるか心配だなど、傾聴の難しさと重要さを再認識させられた研修会となった。

～岩手県～

「傾聴の心構えと方法」とのテーマで、11月3日、四ツ家教会で、午前10時30分から午後3時まで開催し、司祭4名を含め64名が参加した。

参加者からは、「傾聴とはあくまで話すほうが主役、自分の考えを押し付けてはいけないことが分かった」。「受容、共感という姿勢が求められる。相手が自分で答えを導き出せるようにするなど頭では分かったが、それには自分自身の内面をより一層磨くことから始めなければならない。私は傾聴をさせていただける人間になれるだろうか」等の感想がのべられた。

絆のローソク・リレー

東仙台教会　11・10・2
絆！《主において私たちはひとつ》

仙台教区「新しい創造」福島県大会
11・9・18
大会のミサの中で、「絆のローソク」が奉納され、祭壇脇に飾られた。

仙台中央地区合同典礼
インターナショナル・ミサ
元寺小路教会
11・9・25

善き牧者の愛徳聖母修道会　仙台修道院
11・10・4
世界中の 日本中の人々と手をとりあって
今苦しんでいる兄弟姉妹と心をひとつに
して生きて
行きましょう！

オタワ愛徳修道女会
11・9・26

仙台百合学院　ナザレト幼稚園
11・10・6
キリストの目でしっかり見つめ
キリストの想いで すべての被災者に寄り添って心の絆を結んでいきたいと思います。

光が丘スペルマン病院
11・9・27

大阪聖ヨゼフ宣教修道女会
仙台修道院　11・10・8
「思いやるやさしさ」がボランティアを生み、そこに「コミュニティ」が生まれ、全ての人々の心をつなぐ復興のエネルギーになっています。
確かな「思いやりの心」を形にしていくことができますように。

ナザレト愛児園　11・10・7
私たちは、小さくてまだよくわかりませんが、たくさんの苦しんでいる人や、すご～くさびしい気持ちで過ごしている子どもたちやお年寄りのことを心で考えています。

ラ・サール ホーム　11・9・28

喜多方教会　11・10・15

神に結ばれた絆を大切に
一人ひとりが役割を果たして行けますように。

無原罪聖母宣教女会
会津若松修道院　11・10・11
～絆～
愛は一つ　みんなのもの

会津若松教会　　11・10・9

教区年記念福島県の集いを担当した教会のひとつ、仙台教区全体からお集まりくださったことで、私たちは支えられました。心から感謝を捧げます。

震災被害、原発被害の比較的少ない、そして４号線よりもっと西にある会津では、「４→６・４５」は「西から東へ」ととらえて支援し続けます。そして祈り続けます。

「常に新しく創造された人々」として教区の皆様、特に被災地の皆様と心をひとつにして歩み続けます。

会津若松ザベリオ学園
幼稚園　11・10・17

201年私たちの幼稚園の祈りのテーマは「いのち」です。
園児、保護者、教師、地域の方々と「いのちの歌」を歌い心を一つにすることで、命の大切さ、尊さを実感しています。
絆のローソクリレーによって、皆さんとつながっていることが何よりの「力」になりました。
被災地に明るい光がもっと広がっていきますように。

田島カトリック暁の星幼稚園
11・10・12

神さまといっしょにお友だちのために、仲間のために共に祈りましょう。
神さまに見守られ、全ての人が、心豊かに過ごすことができますように。

南会津教会　　11・10・9

東日本大震災による被災地の教会共同体とわたしたち南会津教会共同体は深く、強く、堅い愛の絆で結ばれています。

イエス・キリストに向かって共に歩み、困難を克服して生きましょう!!

会津若松ザベリオ学園小学校
11・10・17

震災は、一時的なものではなく、放射線に対する心配で心を痛める方々も増えています。
人と人との絆が強まり、心を一つにしてこの大きな困難に立ち向かい、復興に向けての歩みを進めていくことができますように。

また、子どもたちが安心して育つ環境を整え、子どもたちと共に、今、自分たちにできることは何かを考え、実行していくことができますように。

この出来事が風化することなく、自分を犠牲にしてまで働いている方々や、他人のために力を尽くしてくださっている方々のことを心にとめて、共に歩みを進めていきましょう。

（要約）

喜多方カトリック千草幼稚園
11・10・14

今日、僕たち私たちは、絆のロウソクの前でお祈りしました。
夏に花の種を送った被災地のたくさんの幼稚園のお友だちから、お返事として元気な絵や折り紙の作品をいただきました。とても上手なので感心し、感謝しています。そして心がつながったことを強く感じています。
これからもお友だちのために祈り続けます。そして世界の人々がもっともっと仲良くなりますようにと祈り続けます。

《お詫び》

今回、データーの取得ができず、一部写真だけでメッセージを入れられないところがありました。

ドミニコ会 雪の聖母修道院
11・10・10

主は助けを求める人の叫びを聞き
苦難から常に彼らを助け出される。
(詩編)

主に希望を置いて被災された人々と心を合わせて私たちも祈り続けます。

震災を経て広報の役割とは…
カトリック広報全国会議

11月15日から17日、カトリック広報全国会議が「カトリック広報の役割―東日本大震災を経て―」をテーマに元寺小路教会信徒ホールで開催された。全国12教区の広報担当者とカトリックメディアに携わる編集者ら31名が参加した。全国広報会議は、カトリック中央協議会（東京・汐見）で行われていたが、今回は、被災地の様子を肌で感じたいという希望が多かったことから仙台での開催となり、主催のカトリック中央協議会秘書室広報と、全国の教区広報担当者有志によってプロジェクトチームを組み準備を進めてきた。

初日は、元カトリック中央協議会広報部長、現在仙台教区広報委員のSr.長谷川昌子（聖パウロ女子修道会）が、今回のテーマについて講演した。

震災後の情報は

現在、仙台サポートセンターのスタッフとして活動しているSr.長谷川は、震災直後、電話も電気もダウンした中で「口コミ」が最も有効だったこと、ガソリンスタンドやスーパー、コンビニの開店時間や、必要な物資がどこで売っているかなどは、ほとんど「口コミ」で伝えられた。被災状況はラジオや新聞で知ることができたが、テレビは全く役立たなかった。新聞も、全国紙は、客観的で冷めた感じがしたが、地方紙は温かみがあり、励ましの姿勢が見られ、地方紙の強みを発揮した。

カトリック広報の役割

知らせることで相手の共感を呼び覚まし好感を持ってもらうこと、相手のニーズに応えて信頼を得ることが重要で、広い意味での福音宣教である。

求められる資質

今、カトリックの広報に携わる人に求められている資質は、教会について広く、深い知識を持ち、時のしるしに気付き、それに応えていく必要がある。伝える能力として、誠実さや、人と協働できること、謙虚さなどの資質が求められる。

カトリック広報の立地点

広報に携わる人は「キリストが人々に接していた姿をモデルに、弱い立場の人々への視点」と、「広い意味」でのカトリック（普遍性）を意識することが必要である。

震災後、被災地の教会を拠点として被災者を支援することで仙台教区が「教会の意味を捉え直している」ことは、うれしいことだと締めくくった。

質疑で、時がたつにつれて、被災地への関心が薄れてきているとの声に、それぞれの広報誌で、被災地の事柄に触れ、発信し続けていくことで、今回の大震災を風化させないことが必要であることなどが話し合われた。

2日目は、仙台教区事務局長の小松史朗神父の案内で、南三陸町、米川、石巻などの被災地を視察した。

南三陸町では、あまり高くない防波堤の向こうに、コバルト色の志津川湾が見える。走って来た道路の両脇は建物の土台だけが延々と連なっているだけ。街の中心からすこし離れた所に、2階建ての倉庫らしき建物がポツンと建っていた。案内されて中に入ってみると10人位の人の中に黄色のベストを着た男性5，6人が逆さにしたビールケースに腰を下ろして、鋏を持ち、黙々と作業している=写真=。ベストには「仙台教区サポートセンター」の文字が見える。白髪頭の地元の漁師さんが、説明してくれた。

自分達が持っていた魚網はすべて津波に流されたこと、北海道はじめ何ヶ所から網が送られてきたこと、定置網とは湾の海底の地形に合わせて作り直さなければならないこと。そしてこの作業にボランティア達が手を貸してくれたことで自分達が立ち上がる気になったと言葉を詰まらせながら語ってくれた。

3日目は、今後の広報全国会議のあり方についての話し合いがもたれ、テーマについては、時を読んで設定し、テーマにふさわしい開催地を選ぶこと、メールでの担当者の日常的な交流の必要性などが話され、派遣のミサで会を閉じた。

参加者からは、今回仙台で開催されたことには、大きな意味がある、これからも、被災地を応援するため、教区報で発信続けたいとの声が聞かれた。

「いのちは神の業であり、神のたまものです。これは私たちカトリック教会の揺らぐことのない確信です。」（21世紀への司教団メッセージ「いのちへのまなざし」より）

母親の胸に安らぐ幼子を見る時人間だれしも、いのちは神様からの贈り物と思うでしょう。この貴重ないのちが、この3月11日の大震災で多く失われたのです。特に原子力発電所の事故においては福島県を中心に放射能の汚染が広がり、人々のいのちは危険にさらされ、生活の基盤に甚大な被害を与え続けています。

「神はそのひとり子をお与えになるほどこの世を愛された。」（ヨハネ3章16節）

神が創造し、愛されるこの世界が神の望まれる場となるために私たちは何ができるのでしょうか。司教団メッセージ「いのちへのまなざし」を再読し、この11月10日に出された司教団メッセージ「今すぐ原発の廃止を」を読み分かち合いたいものです。地球を大事にする会　Sr.小川敦子

被災者に寄り添って
亘理ふれあいマーケット
亘理教会主催で実施

11月6日（日）午前10時から亘理ふれあいマーケットが亘理教会で開催された。

当日はあいにくの雨のなか仮設住宅や自宅から400名近い被災者の方が亘理教会に集まった。

主催カトリック亘理教会と協賛するリクレーション協会をはじめ多くの応援組織が参加。仙台教区からは仙台中央地区の八木山・元寺小路・東仙台・北仙台と県南の大河原教会、オタワ愛徳修道女会が参加した。またカトリック田園調布教会をはじめ菊名教会、那須教会など多くの教会の応援支援を受けてスタッフは約100名が協力。

各協力団体からの衣服と雑貨など被災者向け支援物資を亘理教会に集積。支援物資は推計20トン、数万アイテムを被災者に配布した。

食事は地元企業「マルト食品」のとん汁、千葉の支援団体の餅つき、仙台ダルクの焼きそば各300食を準備した。すべて完食。

被災者の行列は7時前から始まり、9時からテント内に着席して待ってもらう間に教会の傾聴講習会を受講した14名が被災者の話に耳を傾けた。

多くの被災者は暖房器具等の支援物資を手に笑顔で帰宅した。参加者からは、待ち時間のための座席を150席以上準備したことや細かい配慮への感謝の声も聞かれた。

マーケット終了後、小野寺神父（仙南地区担当）の司式による合同ミサを行い参加者や協力した教会と団体の一致した働きに感謝をささげた。

今後は傾聴の経験と成果を踏まえて仮設住宅や自宅避難の方々に継続支援の方法を模索していきたい。（八木山教会　野田和雄）

八戸聖ウルスラ学院
創立80周年を祝う

秋晴れの10月21日、「聖ウルスラ」の祝日に学校法人八戸聖ウルスラ学院（理事長ノエラ・ゴドロ）では平賀司教を始め、小林眞八戸市長、青森県内の私学関係者など多数の来賓出席のもと、創立80周年記念式典および祝賀会が開催された=写真=。

八戸聖ウルスラ学院は、1931年私塾として始められた八戸和洋裁縫女塾を創立の基としている。神様の計らいによって日本天主公教会函館教区に経営が移管され、代々の神父様方が校長を勤められ、その間コングレガシオン・ド・ノートルダムのシスターたちが教育の一端を担われた時期もあった。

戦時中は外国人の神父様方などが抑留という厳しい状況の中で、信仰熱い中村家によって学校は続けられ、一時閉校に追い込まれながらも、戦後再開され、昭和25年聖ウルスラ修道会がその経営を受け次いで今日に至っている。現在、1989年白菊学園から八戸聖ウルスラ学院と校名を改称し、青森県南地方のカトリック学校として福音宣教の基幹を担っている。

宗教教育はもとより、音楽、英語、国際教育にと地域の人材養成、文化発展に献身的な奉仕を続けている。

お祝いの歌を歌う幼稚園児

津波の被災地の方々に心を寄せて
クリスマス・チャリティーコンサート&イルミネーション点灯式

12月3日(土)、「春風の家」（代表 小野敬子）主催で、チャリティーコンサートと光が丘スペルマン病院のイルミネーション点灯式が行われた。

コンサートでは、現在石巻ベース長として活動されているSr.山本紀久代（広島・援助修道会）が自分で作詞作曲した歌をギターを弾きながら歌った。続いて仙台三桜高等学校の音楽部が、手振り身振りで歌う楽しい合唱が披露された。さらに圧巻だったのは、ブラザー ダミアン原田（パリ・エルサレム修道会）のシター演奏だった。

シターは、古くは旧約聖書の詩篇にも登場する（日本では「琴」と訳されている）長方形の共鳴箱に、弦が張られた簡単なものだったが、19世紀に改良され、フランスの修道院等で聖歌の伴奏に用いられた楽器である。ダミアン修道士は、福岡県生まれ、現在フランス・ヴェズレーにあるセント・マリー・マドレーヌ大聖堂のオルガニストを務めている。1999年リヨンで行われたシターの即興演奏で優勝した経歴を持っている。

ブラザーは、曲と曲の合間に信仰についての独自の思いを語りかけながら清く澄んだ音色のシターを奏で観衆を魅了した=写真=。

午後4時30分から、エメ神父によりイルミネーションの祝福が行われ、2人の子どもによってスイッチが入れられ、イルミネーションが点灯した。

＝学習会＝
「原発や放射能って本当はどうなの？」
主催・正義と平和仙台協議会

11月26日(土)元寺小路教会で、篠原弘典氏を講師に迎え、表題の学習会が行われた。

篠原氏は「人間の体は60兆個の細胞でできている。個々の細胞の真中には核があり、その中に生命を維持する人間としての遺伝情報が記されているDNAという染色体がある。DNAは4種の分子が組み合わされた連なりの30億個から成っている。

この分子結合に放射線が飛び込めば（放射線はこの分子結合のエネルギーの10万倍から100万倍のエネルギーを持っているので）遺伝情報をズタズタに切断・破壊する。

被曝はどんなに小さくとも危険というのが科学の到達点である」と、話された。

（畳屋丁教会 杵渕千鶴子）

第34回聖霊による刷新東北大会
「今を生きよう　キリストと共に」
―賛美と感謝のうちに―
2011年10月21日～23日　茂庭荘にて

3月11日、本大会の準備打合せ中に地震が発生し、指導されていたラシャペル神父はその命を捧げられた。多くの祈りによって大会は開催の運びとなり、北は北海道から南は沖縄まで約80名がこの地に心を寄せて集まった。中にはボランテァ活動先の被災地からの申し込みも。講師は赤波江謙一神父（聖パウロ会）。ラシャペル神父の後任のラトゥール神父（北仙台教会）、他に川村昕司（きんじ）神父（東京教区）、畠基幸（もとゆき）神父（大阪教区）が参加され、22日には平賀司教がミサの主司式をされた。

赤波江神父の講話は、今この時、キリストと共に生きるとは具体的にどのようなことかを「今を生きよう、みことばと共に」「今を生きよう、十字架と共に」「今を生きよう、聖霊と共に」と題し、キリスト者の基本的姿勢を丁寧に教えられた。その中で「聖霊に日々満たされるように祈らなければならない。聖霊を受けるのは自分のためではなく、隣人のため、全体の益となるためである」と話され、参加者は聖霊の新たな油注ぎを熱心に祈り求めた。グループによる分かち合いで講話を深め、「証し」の時間には人々に働かれた聖霊の御業が語られた。参加者は聖霊によって喜びにあふれ、賛美と感謝のうちにそれぞれの地へ派遣されていった。なお大会中の献金は復興義捐金として仙台教区に贈られた。

（大会実行委員会）

東北大会に参加して

兵庫県明石教会　春田　記代子

十代の頃、異言は「思いがけずもらったもの」でした。成人して教会を離れてからは、意識しても異言が続かなくなり、思春期の思い込みで話せるようになっていたのかなとそのままにしていました。そんな私が避難所でのボランティア活動をすることになり、支援から外れた人々に出会いました。毎日祈りながら被災地に向かいましたが、復興とは逆に見捨てられようとされている人々の呻きは広まっていました。ある日、祈りの中で、被災者さんの痛みに耐えられず自分も呻き声が漏れてしまいました。すると突然異言が放たれ、自分の中に聖霊が降り、知ではなく、聖霊の力によって活動するようにと神様が伝えて下さったのだと感じました。同じ頃、活動先に母が「生ける水」（聖霊刷新機関紙）を送ってくれ、記載された赤波江神父様の講話に強く励まされました。いつも冊子を携帯して読み、避難所閉鎖まで、小さな人々に寄り添う力をいただくことができました。大会で直接に赤波江神父様のお話をぜひ伺いたいと、被災地から申し込みをしました。今回神父様のお話を通して、日常の関わりを大切に生きることが出来なければ、被災地で寄り添うものとして、生きることが出来ないと改めて感じました。大会後も母と共に再訪した被災地ではただ被災者の方々とお茶を飲み、お話をする。食事をする。何気ない関わりや出会いも、聖霊の働きを意識すると、深く味わいながら活動することができました。被災地で感じることを母と分かち合い、より深く聖霊のとりなしを祈ることができたのも素晴らしい恵みでした。最後に、困難な状況の中で、大会を開いてくださった関係者の方々。被災地に一番必要な支援をくださったことに深く感謝いたします。

注＝異言（いげん）は初代教会に見られた不思議な霊的言葉で、聖霊の働きによるものとされている。

司教団メッセージ「今すぐ原発の廃止を」に寄せて

いわき教会　菅野　晶子

日本は地震が多いことを誰もが知っている。原発は危険なことも誰もが知っている。

だから今までもし大地震がおこったら原発は大丈夫だろうか…と誰もが不安を持っていた。警鐘を鳴らす人もいた。しかし原子力行政は止まることはなかった。

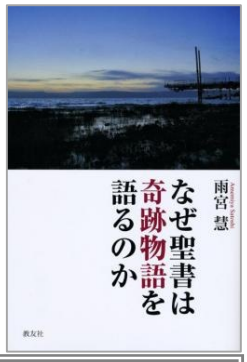
今回の東京電力福島第一原発事故で人々はやっと目が覚めた。福島県民の犠牲のもとに。

司教団が発表した「今すぐ原発の廃止を」というメッセージを全面的に支持したい。

今回盛んに使われた「想定外」という言葉…自然の力を人間が想定できると考えることは傲慢だ。また放射性物質、放射性廃棄物は人間の手に負えないものだ。

地域社会の崩壊、失われた自然の恵み等を思うと心が痛い。

福島県が先ず廃炉を実現し、他県もこれに続くことを期待したい。



新刊案内

なぜ聖書は奇跡物語を語るのか
雨宮慧聖書講話集Ⅰ
著者　雨宮慧／発行　教友社／定価1200円＋税

約30年前、各地の青年会が非常に活発に活動していた時代、東京の多摩ブロックでは、青年信徒を対象に、時々、聖書の勉強会が開かれていました。

その講演会は大好評で、当時の青年たちは、今も大切にその時の講演記録を保管し、役立てていると言います。それほど、魅力あふれる聖書講演会だったのです。

その時、著者である雨宮師の連続4回の講話を再現したのが、本書です。第一回は「聖書という本」、第二回目は「自然奇跡」、第三回目は「癒しの奇跡」、第四回目は「悪霊追放」に分けて話されたものが、本書の流れにそのまま生かされています。

福音書に書かれているイエスのなさった数々の奇跡をどのように理解すればいいのでしょうか。聖書を初めて手にした人がぶつかる問題です。この問いに、やさしく話されたものが本書です。

まず、聖書はイエスの復活を体験した人が、イエスのなさった奇跡を「しるし」として理解し、それを書き表したものなので、単なる歴史書として読むと誤解する、ということから説き起こされ、自然奇跡、癒しの奇跡、悪霊追放の奇跡について福音書の中から例をとり、話されています。

イエスのなさった奇跡について疑問をお持ちの方は、ぜひ、ご覧ください。